

和

子

和書門				
二八五八	九	八	一	一
號	函	架	冊	類

庫文閣内			
二八五八	一〇一	一六	二
號	冊	架	函

二八五八

内閣文庫	
番號	和 28558
冊數	101 (44)
函號	212 265



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



公卿草卷之七十二

武卿燭談七目錄

老臣之部

本多上野助正純

堀田如賀守正盛

松平伊豆守信綱

安藤對馬守重信

河部對馬守重次

土屋但馬守數直



明治十二年

以上種々考へて一人の根本を求め成致せしむ上を指
 神といふ八年は元所社系に初日光の天皇に當り
 更に解所答の如く仕舞ひ上を考へて計し置て亦く
 由りてたはせしむ且子に附焉正統に口を以て易と
 伊賀祖と力口にもけを付稲毛の領地を放りし
 数年浪人せし、以後は遠く北へ先づ此を考へ

城國如雪馬正盛

[illegible]

歌く 花より移之——とて 割山止の——七如雲と云う
 かしこもすけふハ事多くハ供中悉生（き）に御
 事ハ妙なり社也これ御事と云ふ人言ふらむし是ハ
 花より移之の若し——かしこもすけふハ事多くハ供中悉生（き）に御
 事ハ妙なり社也これ御事と云ふ人言ふらむし是ハ

一、方家の師代々の所讓をその内と靜のせりと
少能に家通の他の小きもの一の目明の部より少くも
新中一々くく店名に親をも所て或め 家老といは長
力にく店名をかけあつた二更とも折る名作といは
とてふーやさう事なると折るか思ふ云それハ各の科
多しと多く折ある所の取折をハ大車走へきに
能神の所用折を云々と目からこれと創行用組治

[illegible]

一 孝安卯年、狗死の辰、卯来ニ戸返来し、如くハけを来

追隨に付く一人も殉死するべし。今先王をさぶらふ
 一方の少用は、死すべきを中と爲し、是ともな
 文武臣と爲すべし。子も亦死すべし。是れと爲すべし。

松平任亭

一伊豆守、えへ大に用金集ふと云ひ代左の子にく切名を
十年と云ね奉りたるがとき史記にく切名の時あるは
あま方へ遊びにゆくやうに或時はあまの物坐してあ
まのたよりをきく事と云何事かと問ふと云へ代左の子にて
けつくと云ふ字と新下にはありしと云ふことと云ふ
あまのおおきにゆくと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

采々扇に似たり又扇と用さるる事ありとては歴
 流ハ三ツ扇と家紋とと又浮線後ハ数代の家来の紋成
 しと伊豆も先程の紋ととをさし付られともうゆふ
 梅屋にちまハ三川松よ十八家し円長次の家とれれハ
 羽政の家ととと半不審の追分

伊豆もさる市中の明へ世知無しとて、識る事もあらざり
大抵とせざる所へ或時天智の略、毎か凡るに結ぶ
修明の足代、大さく米とて、伊豆も下知に、荒れの下
野、下知とて、いふ處も、いふ所、かじしとて、付又所との
まじり、の針も、の便、今止むと、ワ、源治の、すゝて、いふ
に、織中の中、さる、とて、さるの、便、代、を、良、と、あ、と、て、下、く
の、移、と、編、も、し、お、し、い、焼、み、と、針、と、い、増、や、と、し、

便に、一足ふくむに不都合の事展しと云ふれど釘の
ゆるみと云ふ下ケ多れ

[illegible]

くも 任用中ひくくいふくく 日月の日月をさるゝ
也ちゆくも星ハち教をさるゝもさるも地も
いふと始大身流ハ日月のこくもさるゝ人多して
等しきて悉くさるゝもさるゝの記にハ生れ
ていふと始大身流ハ日月のこくもさるゝも
さるゝもさるゝもさるゝもさるゝも

一 正保の末 家綱公御を後大綱公にハ似
ちていふと始大身流ハ日月のこくも
けい 後大身流ハ日月のこくも
れをさるゝもさるゝもさるゝも
その供奉と大綱公の身もにて勤る事
も後大身流ハ日月のこくも

流るの老は亦智く少後相もさるゝに
いふと始大身流ハ日月のこくも
いふと始大身流ハ日月のこくも
いふと始大身流ハ日月のこくも
いふと始大身流ハ日月のこくも
いふと始大身流ハ日月のこくも

一 正保の末 家綱公御を後大綱公にハ似
ちていふと始大身流ハ日月のこくも
けい 後大身流ハ日月のこくも
れをさるゝもさるゝもさるゝも
その供奉と大綱公の身もにて勤る事
も後大身流ハ日月のこくも

[illegible][illegible]

語

一朝鮮人の曲り上鏡を——とく依にやうきうに馬場
 と構えらうく時の祀とるに土境と薬まういふ迄
 せんし運送の費ちと暗のる傷多しといふ——ふゆ欣
 とらふし時伊とち下知にう町中の筆作と仰てせりそ
 又斗ちとく土の候とておち筆と極へ紙と並へ
 ちとに芝と依とるやこれハ計かど傷重お時の傷
 容易ハ山木とくといふ

一、地籍調査ハ十支署の職に名を付し之を種年なる
と仰る事也惟てあ所より下り、長江、熊と此
流、家の間に人と能く二階の戸には人を知く大牛と
知くても火更ふくと呼ぶべからず、にわが近大としめて

多くにその便と云ふに何れかの役人評議といふ
 以事始めハとも車一輛を金一萬兩といふ如く
 昔の車ともち用いられて世にふとや人々一萬金を費
 して一車なりて用ひしと云ふ如く其便と云ふに
 松柳毛の車個代底によく調へ容易の便に諸令
 故に是より一車なりて用ひしと云ふ如く其便と云ふに
 年々入内の時いふも金一萬兩に大八葉の御車を
 車及ぬまふ時代押移りし車の用をせし趣近の
 時の式を以て其便と云ふに其便と云ふに
 一五のとき一車なりて用ひしと云ふに其便と云ふに
 年々入内の時いふも金一萬兩に大八葉の御車を
 車及ぬまふ時代押移りし車の用をせし趣近の
 時の式を以て其便と云ふに其便と云ふに

とも御用ニまうりて 對ちされ、社傳もいふ事あり
 とて始 一万ありとて 禁中の車馬に付らざるもの
 大抵ハ往者の法とてなり、半に之を要す乃
 新音ハ北山の日記と寫されけり、又北山要条の兩
 條より斟酌され、御檢約あり、事あり、此の
 少元ハ中興門院、中興ハ後の少元、東御門院にてまは
 是の事ハ今亦永福寺般舟院に在り、將軍家の少元ハ
 二条御城に在り、後人にも事あり、あつてその時代に
 は多く御金と費さるゝ事とて、後人迄くは味し
 ず、その代娘君の出来物、御法乃下画に探出、此宗
 お代金とあり、召留めあり、此時より人々盛の宗
 中にて皆人身圖と爲り、とて其の以幸の時、後國の武士

京洛へ入て瑞へに狼藉を爲す者ありてかゝる
 所へ洛中親をなす由を長史に傳へて之を結らんと
 ちに對馬も之を以ておとしめんとす。其の如くして
 うゝくと切しきる。其の如くして馬なりとてみ
 するに返りて其の中にも所目代トトありてた
 大名の如くしておしきる。其の如くして其の如く
 一く或るふに止む其の如く。其の如く。其の如く
 其の如く。其の如く。其の如く。其の如く。其の如く
 其の如く。其の如く。其の如く。其の如く。其の如く

阿那對馬島 京次

一大敵作及所化界の時對するも 殉死仕由にて山城と
區別せしむ 日列の面、主所、以て不同 對する云々也

[illegible]

少壯
化鳥
書
教直

一仙馬を数枚始め、大和と市に明何城に、因つ
仰付られ、養老一に、まゝに御之政の心令ちて、各々
なる由と大和は、すけり、まゝも、思の心令ちて、用を
とふたぐ、御之、各所と、清養、店の心令ちて、りやと
後れ、まゝも、御之、りやと、御之、りやと、御之、りやと
まゝも、御之、りやと、御之、りやと、御之、りやと
に、養老の心令ちて、御之、りやと、御之、りやと
て、次の日、夜に、御之、りやと、御之、りやと
御之、りやと、御之、りやと、御之、りやと、御之、りやと
西の、りやと、御之、りやと、御之、りやと、御之、りやと
りやと、御之、りやと、御之、りやと、御之、りやと
りやと、御之、りやと、御之、りやと、御之、りやと
りやと、御之、りやと、御之、りやと、御之、りやと

上意のほどに候へども配へしより大和守の門とあるも
 らるるれいさ之中しとあるれそ大和守の門
 づいては残るるより一は是事やあるに候へども
 へどもやうふもはさし上意に候へども大和守の門を
 くにすをまて上意に候へども大和守の門を
 件の所にて手あて早くと仕るべしとおもふ事因に
 長整なりとあるに御あへるる所なくあるも
 けぬの仕るるもあへるる所なくあるも
 仰とある面目と施しとある今依の巻とあるも
 市井の所なりとあるいふ御あへるる所なくあるも
 仕るる所なりとあるいふ御あへるる所なくあるも
 多へるる所なりとあるいふ御あへるる所なくあるも

[illegible][illegible]

うねふ 少政太夫 福和と云 目録にて 中書保りそとさ
くくに 参らねと 編みそ 参り人く 少政太夫のおと
りきりい 仁馬の 参りさ 参りしと 國
合おる

武野燭談卷之七

武野燭談卷之七十二

公羽草卷之七十三

武野燭談八目錄

老臣之部

土屋相模守政直
戸田山城守忠昌
阿部豊後守忠秋
久世大和守廣之
秋元但馬守喬朝
大久保加賀守忠朝
小笠原佐渡守長好

とて皆一盤にまじりてを撰る改訂の生受なりと仰せ
義理を違ひ人々先年所奏を多し明代左何系川
石の地は多く身上親族の中を多し人々相きりて
亡父他馬ちお悪し人々係りし親族系及りし系合
りて是親と叔系と亡父の教養をうめと又
いふも是親恩分と悪きと不なとてお元にて知
る事と傍りしとや

一相模も系所司代の時 禁中より所司代何
の場所と被改始へ所司代の着生大床の邊に堂上櫻
のうき事もちりり地夜白乃廊下に着座して殊
う隈なく人々一き事共止にまじ

禁裏と幕外の以他法隈りりき事共止にまじ

戸田山城も忠昌

一え縁 十年の以旗本五石以上の面、知りて近は花米
しきも地方より知知場り然るに却定奉り賜へり
以て是は沙汰者もふり領私領の因にり給へりき由
仰かへりき由に以後代大名馬の飼料りては戸を不
りて五七石名花も近場之又ハ以系入の所又向き
知りて以て居る人の知知上田の分給へり力の僅なり
知り所近便に地と授けに授けり少お中道に上り不
務近と悉くきに給割極も後傳性といひ却定なり
萩系を以て同き月に月給し老は山城もりりハ割
付は地はしりり高家不務の場ハ大法五つしハ二つ
十分の場ハ四つし定りられ四と給へりりりりり

名存のこゝろ　去る仍て凶年と云へども　飽饑者て三年と
 清兵衛の事ありは義米とハ二斗五升程に被下り
 石ハ沙石を俵懐し沙石俵とりてハ三俵程と三斗
 程の割といふ後さうゆゑに地方にく　婦人とも早換
 取換あるのみ凶年と云ふ所外皆さうなりて其の小
 物等或ハ金細工ホ柳楊し人馬ともさういふに係法有
 る事と此度小物等と云ふは法よりハ少身銀錢必
 然ハ大名ハ所収属れハ讓合せても一年や二年ハ己以
 前ハ小身の地面も町奉行ハ換毛の債付さういふ義
 ありと云ふ時ハ凶年と云ふも三斗半の形勢ハ皆それ地方ハ
 中儀ニ換法有れば東知方ハ西国と云ふ根本お法と不
 し者さう上ハ浮世暫近きハ流れてハ何レ困窮新野郎

御下ハ此段の地形ハ情の罷科多クハ乃割の如き
ハ公方家以迄分と考られ多と見えたりハ此其の道
理に不叶割をなせしとて造られし此以下知極まり
近の因ハ此其の形勢明てハ叶はしとて先般立春の
分と相借り造りし考に先申方又ハ此其の形勢明
人の考知り計と先割りし前方ハ土田を造るんは
考と山城の形面とハ底ハ此其の形勢明の考
くハ知れし所の所と造るんは省の侯の割に造るんは
ハ此其の形勢明と造るんは省の侯の割に造るんは
族ハ此其の形勢明の考と造るんは省の侯の割に
以知りしハ此其の形勢明の考と造るんは省の侯
ハ此其の形勢明の考と造るんは省の侯の割に

家傳の事ハま事ニ入田家ハうきもの指図ニ仍て家
老も人山城の許リ脱くと制山島熟とすて家
の事ハ内訌の事也家松他法もやれし然るに評判必
し公儀ハ然りし事ハ何事にもしる事也加ふ
る一よの族柄にも再仕りましても批判とすれどもお立
向く因習、形とすれどもそれハ名の料等と山島なるを
ひくとするも名も今て夜も泰来も法共に何向し
とて因習も山島越候ももを談もふまぬ山島云々
事とする酒井家老共来ハ一やうとも思ふことハ何
れ不及る因らそき下し身の上思ふことハ金しき子
不忠なれども甥、不知と合ふ事ハ信用しむし
そ不忠のとも不知甥と社七父う切ハまへきれども父
ハ一助にち義の爲に一子と移し甥とまんとすともま
そ子と移さるる本理に悞みし系がなま那ハ特
千石お達那くも甥を格あに不知はとぬおひべき
とならんと被しられバ因情もし依しとす通にし
付きとせ

一杉平次左守吉保候方の石性とい旗え小身の何系
候方の石性地論者も互ふに戸、法も次徳方の石性
と極細分りぬ、南的次徳方の権柄をねに云揚るこ
城事半、社なり月島戸田能やも忠直後山城事ハおれ
能やも父ハ別老職山城も山城も兼て能やもハ
神ドきハ山役師の事、旅り安らふ事ハおれす月ハ
父子の情事一と一後され依し一事も父ハ討談せし

私に名の事ハ元来以て定まりの利談なれ共是
とも兼て竟に能をちの如くに極る多に於て能
品是と思惟せしに要法なる性此を勿論なれバ
今の所の裁り方とて自分の首尾ハ悪くしむる紙
ハ只役の所なれ共父の役義に近隣する事方しなれ
こゝ如何せんと思ふ一かゝる事申に要法なる性此を
何れも宜敷なりとも思ふ能をちの如き事角
も道理の裁り方とて老若山城等の許に於て嫌
と見合ふ所候とて一かゝる兼て此役の事此所との教
誡と御破るにハ其理を明に裁りしと
候に仍て此役を放いし候に御付する共此候に於て
厥いふ中より其父君のと云せし故に山城等より御を

ある付とて理とて思ふ報を候候とて思ふ父子其成敗
に於て其意ある能は父とて思ふ我身を顧み能
の舉動よりハ其社ハあると云へまれとて思ふれし元
より廉直の能をち候に安んじしとて思ふ其父
の許に、山城等より御直に公事裁りしとて思ふ
と評定も其の輩に御ある能をち候に此公事を思
ち方、利運付しとて思ふ其父の許に決りしとて思
候に双方の許とて思ふ其父の許に決りしとて思
も依此見負れし候に其父の許に決りしとて思
軍とて思ふ能をち候に其父の許に決りしとて思
仍て、評定も其の輩に御ある能をち候に此公事を思
の裁りしとて思ふ其父の許に決りしとて思

如くは役を頼られき

河船を渡りたる秋

一孝後ちハハ姓討るる主次と家の總領として主礼會
格式とせしむ討馬ちの長傳中と定まる登城と
しりふと先とと同道有定まる早世し主子討る
河船禰禰の内と陳代ちしてハ性伊豫と利即勅
河船すよ才化十師とそあき少礼の日と又定まるの如くに
河船と先にきく河船し朝堂にき先討馬ちあり
とまた河船ありき婦子揚る河船と延富元年元
江の列中作付られきと忠秋思所やありん初に正能
と初りてハ役辞退さるる定て深きとあり初と世
人きと河船し竟にその所以と不知孝後ち河船を

く河船意の上とに河船時能おれ作付る河
船の鶴ハ 禁裏 仙河板ハ河船と家典既大名に
我河船と薩戸秋後ハ旗かしてハ侍大に執權乃
外若酒井河後ち大利ハ被下る外はと係せしを
孝後ち孝後河船方ハ殿ハ親有る河船と係事
憚有る河船と上き河船酒井河後ち河船の係係と
さるれハ秋上ハと河船し家の眉目ととさるる雅
河船河後ち大炊氏に果されれき秋大炊河後
河船仁と河船と河船と河船と河船と河船と河船と
河船と河船と河船と河船と河船と河船と河船と

一孝後ち河船と河船と河船と河船と河船と河船と河船と
河船と河船と河船と河船と河船と河船と河船と河船と

天樹比良を始りて御丸をき大慶寺に焼く事
御煙のまはにせぬひきま方おにまうきま南
御島所鼠と焼くを玉ひきり天井に杖と横木た
るに火を福を臭く焼く人く同業をんを後者
ト却て人と天井をえんとるに御煙をへて材
子れし御束のれ縁とお放るをきと裏面して天井に
役けのける大工木系木元一馬よりきれ共煙を巻
一向にぐる圓に焼く人く分下とさう拓きて人くお
とまぬ尔は徒士の者殺十人謀むと捕らぬハ貝捕
獲のものもさき有る今ふりもたれにうあを扱よりま
えハ大工共一方の破風とお破れを煙とよりしけらに
とおさうして以後をまじし御坐のるの事おれハ一向の
下端のまハあらはれ御しるまハハ腰災と知頭の名自
分の名と名乗るよりよりよりよりハ徳地をれハ下より
いふまじいづに新業ありとる

一越後中ね及家臣小栗貞他萩田主馬以下人石山あ
と討決有へき下聞と評定をけり双方ハ山岡度く
及ぬハ小栗貞他無名とハ明目ハ一被き越後家の仕立
馬よりハ石山中よりハ徳の事と何と徳文と名かハ
あふきうなるそは徳系ハ徳文と法お誰にけり形と
半セ推くハ徳評定とハ徳地とハ引おとより
取人舌と震ひ未然と考きやふおとふと成るそ
おと後者より社よりけり貞他と云きハ小栗に向
いより方石山の老と云事唯今所おと徳文とけり

久世大和守唐之

一芝新堀御書法と傳ふ因楊南國主と云はれり久世の
後相承る御書法先久々此城と稱せしと云ふと云ふ
作付し久きやと云はれり一に大和守と云ふ者ハ此後新太
帝お後ちと云ふ御書法神道の半ハ故方人されいた因
新ねれと云ふ三ヶ國の人殺しと云ふ僅の城一と云ふ此半
ハ方人といふも昔の御定に東國大名ハ城と云ふ西國大
名ハ石垣と云ふ此定法林と被しと云ふれ此後神道の乃
理きに一も此と云ふ上新方帝ハ天樹成後の御書法お後ちハ
大和守の御書法に唐くあるの作し兼て城と他ある
に作付しハあるハ此辱と云ふと云ふ此半竟下の國新
と救ふまじと云ふ此城と云ふと云ふ城ねハ元御仁と云ふと云ふ

少少此に新くハ御書法方に作付しハ此半竟下の國新
う然りれと被しハ公武御書法と云ふと云ふ此半
此後と云ふと云ふ此半ハ此共食新の浪人持し新と云
一と云ふ此の風すと云ふ此然と云ふ此のまじと云ふ此
御書法ハ人足と被しハ此此刻近し御けハ此此此此此
子刻此刻近し御けハ此此此此此此此此此此此此此
成此世人ハ仁政の此と感考と

秋元此馬也喬胡

一此馬也ハ此馬也此馬也此馬也此馬也此馬也此馬也
中に貧困と云ふ此馬也此馬也此馬也此馬也此馬也此馬也
不易と云ふ此馬也此馬也此馬也此馬也此馬也此馬也
此馬也此馬也此馬也此馬也此馬也此馬也此馬也此馬也

す文くも深き内ハ麻食と云くを年の長に算
られき才智を庸に非せ或め水道の樋毎度換る
有法人も親戚し又水物入し然るに仍く永代不折損
の仕形ありしと評定の処ハ鉄ハ鉄氣かていふに
腐びに轉じ腐る其毒も利に燒物の樋と伏
せむば不折して永久の利に成りしと因縁し他馬ち評
るに他馬ち瓦の類ハ地震折壊て之に送化六に
歩むし厚サ七寸の木を以て極く百年ハ朽べし百年
毎に一度改りしと云ふに何れも物入と云ふ木の家と云
し或は朽者即木と用極く即て以て換るべし此の
地を入せし瓦樋を利しと被りしと云ふ年大地震
きたりて其破壊なりして皆人他馬ちの事知を感し

一天和三年八月八日福葉石馬ち正休古に抄り正後と
害されしハ細有事と云ふ其時の被害は石馬ち
此ハ今般の御礼延引し名老に被出時水戸光国に宣
く石馬ち此ハ中流ありし所なりいまだ死ふ中に
石馬ち被害と云ふ如何なる事ハ是ハ凡此ハ然れば
おも死しと云ふ此ハ其身の家をたれし事なり
ハ此ハ伊を年大坂二条藩府在馬の所中此ハ多
くありしと云ふ他馬ち被りしハ昔ハ此の死に方少上
年ハ酒興の起る見願負の故に云ふ死しと云ふ双方少上
事なり然る事侍の事と云ふ死しと云ふ此の死
しと云ふ死しと云ふ此ハ其後なりと云ふ事ハ此の死

より其の事ハ此の方なりと云れ親類、此より其の
米賜し先代々此におお生の子にれハ家傳を賜是ハ
格にお高時のあきハ在焉徒然の時に酒興長し多ク
命に喧嘩を仕かりそれを乱れにあらせて知れ其に
治る所武士の志地なりといひと嘆く

大久保の堅守たれ

一ツ突ちの事此お後ちた跡ハ故ちて身伴る事也井
伊掃部正直春に此れお存す其の事と情し多ク
ハ多し據よふ是と挑次人と有るに忠告告りて
は若し多飛中と一ひ下上の上を揚るに似る一己を
潔せんとも豈の得奉勅りんやと被言に仍るも感
涙しく再是と御む竟に惣意の下に空しく制係る

赤ん陽張りて子照くはち之なりつ突ち忠なり子つ突ち

忠奥^{始ち}季 寛永九年庚辰此の城よりて五万石賜

口十六年七方よりて揚部町石、所者其女三年八万三

石石に成肥お存はの城よりて要ふ不助のこけに

なりて子ハ今のつ突ち忠なり又ハ口性石系危教境

子始免教博と有るなり本家のまじりとめて忠なりと

る殿有地版の御扨従にり石名地なり上 安柄人

一ツの權にらひて延宝五年七月に老臣と和作金城

より貞享三年正月一万石少給小田原城に仰付られ

曾祖又忠儀の口頃、昭子生質律義方一人に御城と退

出して先持此事に参り 殿有地版の御牌前より

其日御城よりなりて事と坐次より一上礼物領首

物語、新形の仕立を案じまゐるの料、入し、先きの
 のり、月、日記、格式の定法をい、唯、修、右と、た、
 陽を、中、より、合、より、追、の、り、等、より、定、法、を、い、ふ、
 事、を、い、ふ、
 事、を、い、ふ、



武野燭 卷之八

